

もういない  
超短篇作家

氷砂糖

## 収録作品

タルタルソース

白い花の婦人

いたずら好きの魔法使い

橋の架かる町

ハサミの音

しゃぼん玉

飴売りの娘さん

夜空の魚

すてきな二人

本の飼育室

やさしさを抱きしめたら

ルナティック

王と占い師

貴女が噛んだ

アクアリウム・ルーム

もうできない

快晴のち雷雨の予報

フードファイター

魚と眠る

旅に出る

## タルタルソース

少しだけおしゃれ。新しいニット。流行りのグレンチェックパンツは、今日着たら通学用にしようと思う。どのイヤリングを合わせようかとか、コートはこれでいいかなとか、お化粧品も派手すぎないくらいに。まるでデートみたい。

一人で来るのが夢だった洋食店。ちょっと背伸び。

「お待たせ致しました」

目の前にお皿が置かれ、思わずスマートフォンを手に取りうとして我に返る。そういうことをしに来たんじゃない。そういうことは似つかわしくない。

ナイフを入れるとサクッと心地良い音がして、きつね色の厚すぎない衣の中にエビ。

これは全部わたしのもの。この時間もわたしだけのもの。たらふく味わっていいんだ。このミックスフライセットも、これを食べる時間も。

ナイフでタルタルソースを掬う。ゆで卵が入っていないなくてラッキョウが入っているのが特徴らしい。たっぷりと擦り付ける。ほおばる。ほら、素晴らしくおいしい。さっくりした衣とぶりぶりのエビがもちろんおいしい。けれどソースがそれを引き立てる。一人の時間はみじん切りの自由。きっと人生はエビフライを楽しむようなこと。大人の女性になりたくて。おいしいことたくさん、夢だらけの大人に。

## 白い花の婦人

その女性はしとやかで控えめで、けれど美貌は人々の心を奪い、住む世界が違うのだと私に思わせた。

彼女の頭に咲き誇る大きく白い牡丹は彼女が動きたびに微かに揺れ、つい、見とれてしまう。

「見てたわね？」

彼女は気付けば目の前にいて、戸惑う私にいたずらっぽく笑いかけた。どうしよう、どう返したら、そんなことをぐるぐるぐるぐる考えているうちに彼女は横のベンチにどっかりと座り、ポーチから何かを取り出す。

「風が強くて困るわ」

啞え煙草でも美しく見える彼女に、横に座ってもいいか訊く。

「なぜ遠慮してるの？」

ふうつと煙を吐き出した彼女の横に座った。煙と、知らない香水の匂い。

びっくりしてしまっただけ。

そうつぶやくと、彼女はこう返した。

「人に見てもらうためとか、ましてやびっくりしてもらおうなんて思って生きてないんだけどね」

吸い終わると彼女はすっと立ち上がり、凜とした姿勢で喫煙所を去って行った。後ろ姿も美しい人だった。

私も吸い殻を灰皿へ始末した。右手で頭に触れる。大きなたばみ、次の春には咲くだろうと言われている。

あの人みたいな白い花びらだといいなと思う。

## いたずら好きの魔法使い

「ちょっとした間だけだから」

そういった魔法使いは、わたしをチョココレートに変えてしまった。薄暗いショコラトリー。ひやりとしたショーケースで照らされるわたしは、これからどうなってしまうのか不安で不安でしかたがない。

訪れるお客さんはみんな真剣な目でショーケースを見定める。選ばれたら食べられてしまうかもしれないので怖いけれど、選ばれずにずっと売れ残るのも心細い。

他のチョココレートたちはどんどん売れてゆき、何ともいえず哀しい気持ちになってきたところに、一人の青年が現れる。果たしてチョココレートのわたしは、その青年に買い上げられた。

どのくらいの時間がたったか、箱からわたしは取り出される。青年の指に摘ままれ、



くちびるに触れると、わたしは熱で柔らかくなっていた。青年がこらえきれないと  
いった風に笑いだす。

「ほんとに君は可愛いなあ」

なんてこと、青年は魔法使いの変装。魔法使いの舌に弄ばれ、わたしは美味しく頂  
かれてしまった。

## 橋の架かる町

白鷺の町にはたくさん橋があります。たくさんたくさんあります。

旅人であるわたしたちは、その橋をひとつひとつ渡りました。

橋はどれも美しく、わたしたちは互いに写真を撮りました。二人で写った写真はありません。残念なことですが、白鷺の町では言葉が通じませんでした。写真を撮ってほしいというたったそれだけの言葉を伝えることができず、仕方なしに私たちは相手の写真を撮りました。

とても美しい町でした。

最期の一つの橋を渡り終え、わたしはふと、橋から下を覗いてみました。

きらきらと星を湛えた銀河がそこにはありました。

「ねえ、見て」

わたしは相手にも呼びかけ、橋の下を見てもらいました。

「わあ、すごい」

相手もその光景に圧倒されたようでした。

渦巻く銀河は流れ流れて天の川になると聞いたことがあります。そしてその対岸にそれぞれ牽牛と織姫がいます。天帝の御心のままに流れる銀河がとても穏やかであるのに、わたしは少し、ふしぎな安堵感を持ちました。

## ハサミの音

思い出が重く垂れ下がってきたのでサロンを予約した。

時間通りにサロンに着くと、荷物を預けて心地よい椅子に案内される。バナナ型のクッションをおなかに置かれ、なるほど、ひじを置くのにちょうどいい。

今日の担当です、と細身の男性。

「どうされました？」

「さっぱりしたくて」

まず頭の中をきれいにクレンジングされる。やさしく。こまかく。やわらかく。気持ちいが穏やかになったところでハサミが入る。

シャキシャキ、シャキシャキ。

思い出がばらばらと床に落ちてゆく。

シャキシヤキ、シャキシヤキ。

ハサミの音はリズムカルで、耳から快感を感じる。目を閉じて音に耳を澄ませる。目を開けて見る。ハサミが動いている。目を閉じる。聴く。シャキシヤキ、シャキシヤキ。思い出を切る音は小さな音だけれど、ちゃんと思ひ出は少なくなつてゆく。

シャキシヤキ、シャキシヤキ。

「いかがでしょう」

鏡を見るとすつきりとした頭になっている。

仕上げてトリートメントをされながら、見ていたのは鏡だったのだと改めて気付く。左手で思い出を切られたのは初体験だな、と思う。

## しゃぼん玉

甥にせがまれて洗剤を水で割る。ストローを切って渡すと、甥は嬉しそうにしゃぼん玉を吹いた。

「ねえねも」

ストローの切れ端を液につけ、ゆっくりと息を吐く。ふうっと丸くなる虹色にわたしが、移った。そのまま空へ舞いあがり、甥と自分を上から見る。

割れたと思ったらわたしは甥の横でしゃぼん玉を吹いている。何か、不思議にわくわくするような感覚で、わたしはもう一度しゃぼん玉を吹く。今度は少し小さめに。果たしてわたしはしゃぼん玉に移り、風に流されて家を見下ろしている。自分の意思で移動はできない。

割れて戻って、たまたま再度。割れないようにそうっと。

移ったわたしは、今度は高く高く流れ、甥も家も見えなくなる。ただ青い空。雲もなく。どこまで上がるのだろうかと思っいるとしゃぼん玉は割れた。

隣に甥はおらず、ストローなど持っていないなくて、わたしはわたしに戻れなかった。それほど悲しくもなく、不安でもなく、どこかほっとした。

## 飴売りの娘さん

あるところに飴売りの娘さんがおりました。きらきらと輝く色とりどりの飴はたいへん人気がありました。

あるとき国の王様がお忍びで飴売りのお店へおいでになりました。きれいな飴を手渡された王様は、娘さんに一目惚れをしてしまったのです。お城に戻った王様は家臣に命じ、娘さんをお城に嫁がせました。無理矢理お城へ連れてこられた娘さんは三日三晩泣き続け、可哀想に思ったねずみが娘さんをなぐさめるほどでした。

四日目の朝。娘さんは飴作りを始めます。喜んだのは王様でした。王様は娘さんがお城で暮らす決心をしたのだと思ったのでした。飴ができあがると娘さんは一粒を王様に食べてもらいました。するとどうでしょう。たちまちのうちに王様は若返り、子供の姿になってしまいました。ご自分が王様だという記憶もなくしています。娘さん



は護衛の目をかいくぐり、子供になった王様を連れて元の飴売りのお店へ帰ってゆきました。

「それからそれから？」

手伝いながら聞いていた少年は飴を一粒口に入れ、お話の続きを求めます。

「ここから先はまだ知らないのよ」

さあ今日はお祭りだから忙しくなるわ、と飴売りのお姉さんはせっせと飴を袋に詰めてゆきました。

## 夜空の魚

魚は、気付くと夜空に放り出されていた。そこはとても静かで、無数の星たちが輝いていた。

海の中と同じで上も下もなく、前も後ろも自由で、右も左もどうでもよかった。だから、魚ははじめ、特に不便を感じなかった。進みたい方向へ進み、ぐるりと翻ったり、ぐるりと回ってみたりした。襲ってくる大きな魚はいなかったし、騙してくる釣り針もなかった。

時間が経って魚はお腹が空いてきた。夜空には敵もいなかったけれど、食べ物も見当たらなかった。星を食べることができるかもしれないと一つに目をつけそちらへ泳いだけれど、どんなに泳いでも泳いでも、星は遠くにあって届かなかった。静けさは冷たさを帯びていて、魚は心細くなってきた。

魚は泣いた。

なぜ泣いたのかは魚自身にもわからない。寂しくて空腹で不安で、そういういろんな思いがごちゃ混ぜになって魚の目から雫がこぼれた。雫は無重力の中で丸い形をとり、ふよふよと魚の周囲を漂った。それは涙だったのだけれど、魚は見たことがなかった。なのでわからなかった。

魚は涙を食べた。かすかな塩味が、魚を海へ還した。

## すてきな二人

水男とアリスはとても仲の良いカップルです。

些細な喧嘩のとき、アリスがマグカップを投げても包丁を持ち出しても、水男は穏やかな表情でアリスを見守ります。水男の体は冷たい水でできていて、投げつかれたマグカップも突き立てられた包丁も意味をなさないので当然のことなのかもしれない。水男とアリスはとても仲の良いカップルです。

喧嘩のあと、アリスは水男とお風呂に入ります。水男はアリスの体を隅から隅まできれいに洗い、最後にそっと清潔なバスタオルを渡します。アリスはそれで体を拭き、二人は仲直りをします。水男とアリスはとても仲の良いカップルです。

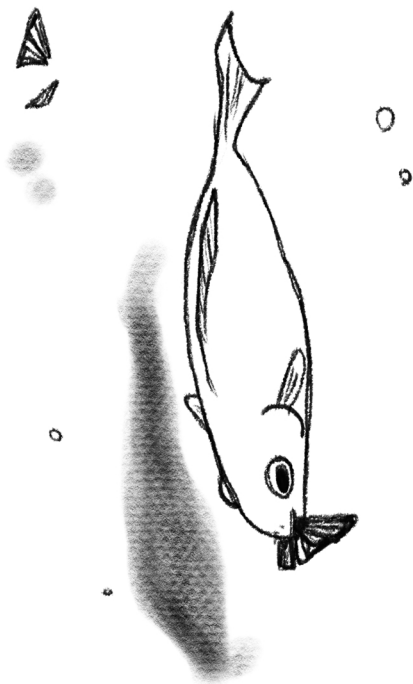
水男はアリスを抱きしめました。ざぶり。水男の体にアリスの頭が沈みます。ごぼごぼ。ごぼごぼ。アリスはもがき、手足をばたつかせます。水男はアリスの頭を引き

上げ、息の荒いアリスにくちづけをします。そしてまた抱きしめました。ざぶり。ざぶざぶと水男の体が飛び散りますが、当の水男は意に介していません。ざぶざぶ。ばしゃばしゃ。やがてアリスは静かになって床に倒れ込みました。水男はふふっと笑って、ばしゃりと形を失いました。水男とアリスはとても仲の良いカップルです。

## 本の飼育室

卵から孵った本がサナギになり、殻を破ってひらひらと舞い踊る。

一冊がとさつと手に留まったのでばらばらとめくると、遠い国の戦争を伝えるルポルタージュだった。



## やさしさを抱きしめたら

やさしさは緑色の大きなゴムまりのような姿をしていた。とにかく大きい。立ち上がった私ほどの高さがある。こんな大きなものがどうやって部屋に入り込んだのかは全くわからないが、やさしさはそこにいた。

ぼよんぼよんと弾む。私に触れようとし、無意識に私は避けた。少しさびしそうにやさしさは弾み、一旦距離を取ってまたぼよんぼよんと近づく。大きな球体ではあるけれど不思議に恐怖は感じない。やさしきなんだな、と納得する。近付かれ、避け、離れ近付かれ、繰り返すうちに触れるか触れないかのところにやさしきは定位置を決めたようだった。

しばらく時間が経って、私からやさしさに近付いた。相変わらずぼよんぼよん揺れている。そっと触れる。ひんやりとした手触りは夏の夜にはちょうどいいようにも思



えた。

私はやさしさを抱きしめた。やさしさは逃げなかった。こういうときに逃げたほうがいいということも知らないのかもしれない。ぎゅうつと力の限りやさしさを抱いた。やさしさはくびれ、さらに力を込めると音を立てて弾けた。中には透明な液体が入っていたようだ。

床を拭くために取ったバスタオルで、まずは目から流れていた液体を拭いた。

## ルナティック

あなたはご存じありませんが、あなたは獣を飼っています。見えないでしょう。獣はあなたの中にいます。

わたしだけが知っています。わたし以外の誰も知らない方がいい。あなたが獣を見せてくれるのはわたしの前だけであってほしい。

闇を湛えた瞳は黒々と美しく、手触りの良い毛は艶やかに美しく、細い首は繊細に美しく、肢体はしなやかに美しく、柔らかな肉は食べてしまいたいほど美しく、甘える姿は抱きつぶしたいほど美しく、横たわる姿はなにもものにも代えがたいほど美しく、上げる鳴き声は本当に可愛らしく愛おしくて、できることなら、あなたの獣をわたしのものに、わたしのものにしたいたいと強く思っています。

あなたのご存じないあなたが中に飼っているあなたの獣。

わたしはその獣を愛しています。あなたを愛するのと同じくらいに。いや、あなたは機嫌を損ねてしまいかもしれませんが、あなたを愛する気持ちよりもっと激しい想いかもしれません。

わたしはあなたを愛しています。断じて、あなたが獣を飼っているからではありません。けれど、それはそれとしてあなたの飼っている獣をこの手に欲しいのです。

……ああ、今夜は月の光が綺麗ですね。

## 王と占い師

王宮に召し上げられた占い師はずっと沈黙を続けていました。

王はいろいろなことを訊きたかったのですが、占い師はただ黙っているだけで、帰してほしいという言葉さえも発しません。

大臣の一人が占い師の胸ぐらを掴み、不敬である、と言いましたが、王は慌てて大臣を止めました。

「そなたが沈黙を貫くのは何か意図があつてのことであろう」

王は続けます。

「だが、そなたが本物ならば、他の国に渡られては困る。解るであろう？」

占い師には召使いがつけられ、宮殿の中に一室が用意されました。初めのうち頻繁に占い師のもとへ大臣たちが訪れましたが、言葉を話さない占い師を怒鳴りつけるの

も疲れるのか、一年の後には王が訪れるのみになりました。

王は占い師の前でさまざまな話をしました。とても私的な話に及ぶこともありましたが。王は話を終えると穏やかな顔で部屋を去りました。それは毎晩続きました。

王は密偵を使って声を潰す薬を手に入れていました。

「飲んでも飲まなくても構わぬ」

占い師に差し出しながら王は言います。

「飲めばそなたは自由である」

占い師は薬を飲むことなく、一生を宮殿で過ごしたと言います。国は静かながらも平穩に続いています。

## 貴女が噛んだ

指切りのあと、貴女は私の小指を舐めました。その妖艶な赤い唇に視線は釘付けになっており、痛いと思う間もなく小指は噛み切られていました。

とても美しい光景でした。

貴女の艶めく唇に絡め取られた小指。貴女は出し入れしながら齧り、食み、咀嚼し、やがて嚥下しました。

「貴方の約束はもう、私だけのものよ」

そう云って微笑む貴女をとて愛おしく思いました。交わした契りを必ず、と心に強く思いました。もう貴女に夢中でした。

貴女は狩られました。

確かに貴女は魔物でした。

この身を貴女だけに捧げると約束したのに、全てを貴女に喰われることを誓ったのに、貴女は、貴女は。

指の一本欠けた手を、貴女の骸に添えました。

## アクアリウム・ルーム

これ以上失うことができない私は、けれど寂しさにヴァーチャルフィッシュを部屋に放った。

今はヴァーチャルペットにもいろいろあって、懐く犬や喋る鳥がやはり人気で、成長するキメラなんかも売れ筋らしい。ヴィジョンだけのものもあるし、精巧な機械の体を持つものもある。飼える人がうらやましくないとさえ言えば嘘になる。けれど私は、失うことができない。これ以上、失うことは。

「懐きません」

購入手続きに移る前にポップアップされた注意書き。わかって購入した。それを求めたのだ。

だって怖いもの。



情が移ったら、通じ合ってしまったら、失ってしまうから。

私の思いを知らないまま、ヴァーチャルフィッシュはヒレをゆらりと動かしている。ドアを閉めきってしまうとそこは閉じた水槽で、外の世界など存在していないかのような気がしてくる。私は手を差し伸べる。ヴィジョンだけのヴァーチャルフィッシュは、そこに存在していないので手をすり抜けてゆく。

## もうできない

ちようちよ結びを生業としている。

始めた頃は巧く結べないことも多かったし、高度なものは初めからお断りを入れたりした。

もう中堅の結び師ともいえる今。

ほとんどのちようちよ結びは特に苦もなくきれいに結べるし、難しいものもなんとかちようちよ結びの形にはできる。

ちようちよ結びの世界に足を踏み入れた頃に知り合った、りぼん結び師がいる。

ちようちよ結びとりぼん結び、似ているところも多くアドバースも多くもらい参考になった。可愛がってくれるこの人を畏敬の念で見っていた。

この人はりぼん結びの高みにいた。

出来上がったものを見るだけでその人の仕事だとわかったし、ジャンルが違っても結び目を見る目は的確だ。

「なあ、君はもっと巧く結べるんだから、もっと高みを目指すべきだよ」  
飲みの席でいわれて、小さく、絶望した。

私はひとつひとつ、精を込めて結んでいる。稀に満足いかないものを結んでも、それは解いて結びなおすし、どれも私の仕事だと堂々といえるもののもりだ。

あなたのようににはできない。

私は転職について考えることが多くなった。

求人票を見るけれど、ちようちよ結び師として過ごした年月が邪魔でためらってしまふ。

## 快晴のち雷雨の予報

広場では古本市がひらかれています。

大人になりそこねた少年少女は、年をとると本になります。本になって読まれて、捨てる代わりに古本として売られて、また誰かの手に渡り、読まれて、売られて、繰り返して。誰かが読むに堪えた本というのは面白さの証明になり、手あかのついたよれよれの本に高い値段がついているというのもよくあることです。古本市とはそういう本を売買する場所です。

一人の少年が一冊を手に取りました。ぱらぱらとめくり、苦虫をかみつぶしたような表情。

「この程度で」

そうつぶやくと、少年は本になってしまいました。

新品のきれいな本は珍しさもあり目を惹き、幾人かが手に取ります。しかし皆、またもとの場所に置いてしまいます。

少年は明日、大人になるはずでした。

少年にはすでに、大人になれる未来がありました。

本になった人間がまた人間に戻ったという話は聞いたことがありません。

天気予報は当たりそうで、店主たちは片づけを始めます。売れ残りの本たちは在庫として箱に納められてゆきます。古本屋の本棚に並べられるものもありますが、大半は次の古本市まで箱の中です。

## フードファイター

目の前には白い立方体がある。白い皿に盛られている。それは絹ごし豆腐のように柔らかく、けれど豆腐のような甘味や旨味などなく、丁寧に味わいを取り除かれている。

わたしはスプーンでそれをすくい、口へと運ぶ。もちろん美味しくなどない。ただそこにあるから、という理由で、すくい、口へ運び、すくい、口へ運び、繰り返すとそれは皿から消失する。空っぽになった皿はテーブルの隅へと積み重ねられ、新たな白い立方体が盛られた皿が目の前に置かれる。わたしはそれもまた、スプーンですくって口へと運ぶ。

わたしがこれを食べる様子はテレビで中継されている。詳しくは知らないが、どんなでもない視聴率を誇るらしい。準備された立方体を全て食べ終えたと拍手喝采。今、

わたしはこれをメインの仕事としている。

街角で声をかけられることも多くなった。ありがとうありがとうと繰り返すおばあちゃんや、応援してますと言ってくれる学生さん。泣きながら握手を求めてきた若い女性もいた。

哀しみやつらさ、絶望や怒り、そういうものを押し固めた立方体も、差し入れて貰った愛情のソースをかければ、まあ、食べられないことはない。

## 魚と眠る

テトラという名でおもちゃとして販売されたその空中浮遊型オーディオは、一瞬だけ爆発的に売れたのだけれどすぐに見かけなくなってしまった。細長くて小さな銀色は熱帯魚のように見えないこともなく、おそらく商品名の由来だった。

彼女はベッドに入る前に必ずテトラを浮かせた。だから彼女との行為の記憶には音が伴っている。決まった曲をかけるわけではなかったけれど、せつない旋律を好んでいたのかな、という気はする。

初めての夜、彼女が僕を待たせてテトラを浮かせるのがひどくもどかしかった。待たされるのも不満だったし、小さめの音ではあったけれど余計な刺激が耳に入ってくるのも気に入らなかった。彼女の体は細いのに柔らかくて、濡れていて、締め付けた。力尽きてそのまま眠ってしまい、目が覚めると彼女はいなかった。テトラも。



幾度夜を重ねても一緒に朝を迎えることはないままの日々。ある夜、テトラが浮か  
なかつた。電池切れかな、と彼女は困ったように笑い、僕は構わないのでいつものよ  
うに狂おしく彼女を抱いた。音楽が流れていないこと以外は何も変わらなかったけれ  
ど、それが、彼女と過ごした最後の夜だった。

## 旅に出る

ツギハギのロバは船に乗り込みました。飼い主に捨てられた哀れなロバは、この船に乗るしかない、そう思ったからです。船は行く先を誰も知らず、けれど毎日出港するこの船には、いつもたくさんの乗客がいます。

「よう、アンタはどんなところに行きたいんだい？」

ツギハギのロバに話しかけたのは片耳のないウサギでした。その姿はロバに負けず劣らずみすばらしいものでした。

「ここでないのなら、どこでも」

声を出して答えると、ツギハギのロバはとても不安な気持ちになりました。周囲を見渡すと乗客の誰もがどんよりと暗い目をしています。話しかけてきたウサギも、決して明るい気持ちの旅路ではなく、この船に乗る以外の選択肢がなかったように見受

けられました。

— そうかい、と、いってウサギはロバの横に並んで海のほうを見ていました。仲間が欲しいわけではないようでした。同じ境遇のものがある。ツギハギのロバはそう感じ、ウサギの横で同じように海を見つめました。

空は深く青く、風はひやりと冷たいものでした。誰も彼らの船出を祝ってはいませんでしたが、船は汽笛をあげ、ゆっくりと、陸を離れ始めました。もう、戻ることはいけません。

狭義の《超短篇》を書かなくなって一年以上が経過しました。

二〇〇五年に超短篇と出会い、長く書いてきたような気がします。居心地が悪くなっても名前を変えて書き続け、ライフワーク的でした。

書かなくなった理由は複合的なものですが、一つだけ挙げるなら、もう私には私の求める超短篇が書けなくなってしまったことでしょうか。これ以上の成長を望めない。それはずいぶんと哀しいことに思えて、それを自覚してしまう次の作品が書けませんでした。

超短篇作家だった氷砂糖の最後の超短篇集です。評価が芳しくなくとも気に入っている二〇作品を収録しました。お楽しみいただけると幸いです。

#### 奥付

二〇二〇年六月六日発行

著 氷砂糖（魚と飴ボックス）

longway12k@yahoo.co.jp

<http://ice03g.parfe.jp/>

印刷・製本 合同会社いこい おたクラブ